

第1章

世界の実践から
日本の保育を考える ①

第1節 講演 ● 世界の実践

- 1-1-1 イタリア ● レッジョ・エミリア市
すべての子どもに乳幼児教育を保障するコミュニティ
- 1-1-2 ニュージーランド
幼児期の学びの成果を包括的に記述する
「ラーニング・ストーリー」
- 1-1-3 イタリア ● ピストイア市
環境を通じて心の安定や心地良さを追究
- 1-1-4 中国 ● 上海市
伝統的な集団教学から遊び中心の幼児教育へ

第2節 講演 ● 保育をめぐる状況の変化

- 1-2 複数の視点から評価してこそ幼児期の発達を保障できる

第3節 パネルディスカッション ●
世界の保育と日本の保育

※本章は、2015年2月に行われた第4回ECEC研究会の講演録です

イタリア ● レッジョ・エミリア市

▶ レッジョ・エミリア市のECECの特徴は p.60

▶ イタリアのECECの基礎データは p.112

すべての子どもに
乳幼児教育を保障するコミュニティ立教女学院短期大学准教授 **森 真理** Mori Mari

立教女学院短期大学准教授。専門は保育内容国際比較、子ども理解を深める保育のありかた、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育の理論と実践との対話。東京近郊のキリスト教主義の幼稚園と米国ニューヨークの日本語による幼稚園に勤務。その後、ニューヨーク市立ハンターカレッジにて心理学士号 (B.A.)、コロンビア大学教育大学院 (ティーチャーズ・カレッジ) にて幼児教育学文学修士号 (M.A.)、教育学修士号 (M.Ed.) を取得し帰国。教育学博士号 (Ed.D.) 取得。日本にて保育者養成並びに保育者現職研修に従事。著書に「レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～」(フレーベル館、2013年) など多数。

※プロフィールは講演 (2015年2月) 時点のものです

子どもの情緒や創造性
人間性を豊かにする街づくり

レッジョ・エミリア市は、イタリア北部に位置する人口16万5,000人ほどの都市で、1945年の第二次世界大戦敗戦以来、乳幼児教育に力を入れています。1991年12月、アメリカ「Newsweek」誌に「世界で最も優れた乳幼児教育が行われている学校」として同市立ディアーナ幼児学校が紹介されたことがきっかけの一つとなり、先進的な乳幼児教育都市として世界的な注目を集めるようになりました。私も強い関心を抱き、何度も同市に直接足を運んで子どもや乳幼児教育に携わる方々と対話を重ねてきました。

同市の乳幼児教育の概要をご説明しましょう。イタリアには乳幼児教育についての国定指針がありませんから、同市は独自の指針を設けています。それは、「教育はすべての子どもの権利であり、コミュニティの責任である」という宣言に始まります。この言葉通り、子どもの

情緒や創造性、人間性がさらに豊かになるように、街全体で取り組んでいます。

例えば、公立リサイクルセンター「レミダ」を設立し、企業などから寄せられた廃材を市民に無償で配布しています。乳幼児教育施設では、子どもがここから自由に選んだ材料をさまざまな活動に充てています。さらに、毎年5月の土曜日・日曜日に行われる、市民による文化祭ともいえる「レッジョナラ」では、子どもと大人のために多彩なイベントが催され、誰でも自由に参加できます。保育者や各種専門学校の学生、聖職者など様々な市民が子どものために民話や自作の素話を語ったり、街のあちらこちらにある広場を舞台として劇団が演劇を上演したりといった具合です。2日間とも市内の美術館や博物館が無料開放されますから、子どもは貴重な収蔵品に間近で接することもできます。同市の乳幼児教育はよくアートに例えられますが、ここにご紹介した市としての取り組みにもその一端がうかがわれると思います。

また、自分の気持ちや考えを言葉によって他



広場に立つ朝市の様子は、多くの買い物客で賑わう。



広場には人々が集まり、さまざまな話に花を咲かせる。

者に伝えることを尊ぶ風土があるため、人々が集まり、言葉によるコミュニケーションを図りやすいように街が設計されています。広場が多いことはその一例です。広場には週3日朝市が立ち、買い物客と商人、あるいは買い物客同士が談笑する姿がしばしば見られます。平日のお昼時には勤め先から多くの人が広場に出て、美術や政治など様々な話をしています。言葉を自在に用いて意思を疎通する大人の姿を間近に見ることで、子どもは思考力や表現力を大きく伸ばすと考えられます。

子どもと大人とが ともに気づき、共感し合う 「プロジェクトツィオーネ(*)」

レッジョ・エミリア市には2種類の乳幼児教育施設があります。1つ目は0～3歳が通う乳児保育所、2つ目は3～5歳児が通う幼児学校

で、それぞれ公立のほかに私立や教会立などがありますが、先ほどご紹介した同市の教育方針はいずれにも尊重されています。また、公立の乳児保育所、幼児学校では、保育者の勤務時間は週36時間で、そのうち6時間を研修に充てられることが保障されています。つまり、有給で研修を受けられる制度が確立されているわけです。日々のふりかえりはもちろん、研修では実践哲学や内容、評価について、ペダゴジスタ(教育主事・コーディネーター)を交えて学びの時をもちます。

すべての乳児保育所、幼児学校では伝統的に、「プロジェクトツィオーネ」という活動を柱としています。その内容は様々ですが、遊びと学びとを対立するものとは考えず、両者を一体化させる活動であることは共通しています。公立乳児保育所における実践例を見てみましょう。

私が見学した『食』を探究する「プロジェクトツィオーネ」では、材料の収穫、調理、盛りつけ、テーブルのセッティングというように、料理にかかわるあらゆる作業を子ども自身の手で行っていました。そのどの工程にも子どもの自由な発想があふれ、子ども一人ひとりがキャンバスに好きな絵を描くように、生き生きと料理を作り、デザインしていました。これを支えているのが、子どもに対する保育者のかかわり方です。保育者やアトリエリスタ(芸術士)は活動に取り組む子どもに常に付き添っていましたが、子どもに「こうなさい」と指導するのではなく、子どもと同じ視点に立ち、「凄いな!」「どうしてだろう?」と言葉を交わしながら、子どもとともに気づき、感動していました。

「プロジェクトツィオーネ」にかかわる大人は、保育者ばかりではありません。保護者はもちろん、活動内容に応じて調理師など多様な職業の人が参加します。そして誰であっても、子どもとの関係は対等です。つまり「プロジェクトツィオーネ」は、子どもも大人もともに主人公となり、対話を通して共感し合う活動なのです。その共感を言語化する過程で、子どもの気

づきや感動が何倍にもなり、思考力や表現力、創造性などを包括的に高めることにもつながると考えられます。

*プロジェクトツォーネ (progettazione) とは、子どもの状況を観察し、仮説をもとにデザインし、実践するといった意味のイタリア語。日本、欧米やアジア諸国では「プロジェクト」と訳されることが多い。対義語としては、あらかじめ決められたカリキュラムやプログラム、方法通りに展開する実践などが用いられている。

大きな社会変化に応じて 乳幼児教育をいかに 改めるかは日本と共通の課題

1945年の第二次世界大戦敗戦を機に始まったレッジョ・エミリア市の乳幼児教育には、今日までいくつかの変遷がありました。例えば、以前は子どもの認知的な発達などを評価していましたが、「プロジェクトツォーネ」によって伸びる子どもの多様な力を計量化することの危険性が認識され、現在ではそうした評価は行われなくなりました。ただし、乳幼児教育の根底にある保育観、子ども観は揺らいでいません。

同市における乳幼児教育実践の創始者の一人であるローリス・マラグッツィは、子どもが想像力や創造性、知的好奇心にあふれ、無限の可能性を秘めた研究者であることを訴えたほか、子ども一人ひとりが声をもつ市民であることを強調しました。この「子どもは市民である」と

いう考えが、子どもの教育を受ける権利を保障し、それをコミュニティの責任である、とする乳幼児教育方針はもちろん、子どもと大人とが市民同士として対等な立場でかかわる教育実践にも生きているのです。

近年、同市の先進的な乳幼児教育が世界中に紹介された影響からか、同市には各国からの移住者が目立つようになりました。そのため人口が増え、多民族化が進んでいます。広場の朝市に行くと、スワヒリ語、フランス語、ドイツ語、中国語、中国語の中でも北京語も聞こえれば広東語も聞こえるというように、実に様々な言語を耳にし、文化的な背景の異なる人々が共存していることを実感しますから、市民の気質などにも変化が生じているでしょう。そこで、このような大きな社会変化に乳幼児教育がどのように対応するかが、新たな課題となっています。根幹となる保育観、子ども観は維持しながら、変わりつつある市民の求めに応じて新しい教育実践をつくっていく必要があるのです。これは、多様性が課題となっている日本の保育現場と相通ずることでもありましょう。

優れた乳幼児教育の伝統をいかに守り、いかに改めるか。レッジョ・エミリア市と日本の保育者同士の対話はこの問いに答えるための鍵となると、私は考えています。

※レッジョ・エミリア市内の写真は、著者が特別な許可を得て撮影したものです

1-1-2

第1節 講演 ● 世界の実践

ニュージーランド

▶ ニュージーランドのECECの特徴は p.68

▶ ニュージーランドのECECの基礎データは p.102

幼児期の学びの成果を包括的に記述する 「ラーニング・ストーリー」

十文字学園女子大学教授 **上垣内 伸子** Kamigaichi Nobuko



十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授。専門は保育学、発達臨床学。保育者養成と、保育という臨床的な場での個々の子どもの発達と心的世界の理解やそれに対する援助のあり方が研究テーマ。OMEP（世界幼児教育・保育機構）日本委員会理事を務め諸外国の保育者との交流を楽しんでいる。お茶の水女子大学大学院（児童学専攻）修了。子どもの城小児保健部心理相談員、お茶の水女子大学家政学部児童学科助手を経て現職。著書に「自由保育とは何か―形にとらわれない心の保育」（フレーベル館）「保育者論」（同文書院）「世界に学ぼう子育て支援」（フレーベル館）など。

※プロフィールは講演（2015年2月）時点のものです

ボトムアップで作成された 保育の ナショナル・カリキュラム

ニュージーランドでは1986年の幼保一体化を機に、保育の質の向上にそれまで以上に力を入れるようになりました。そして、保育者の声を広く集めながら、いわばボトムアップで保育のナショナル・カリキュラムが作成されていき、96年に公布されました。付けられた名称は、「テ・ファリキ」。ニュージーランドの先住民族マオリの母語、マオリ語で「敷物」を意味します。

ニュージーランドには欧州系とマオリ系の2つの文化が共存していますから、「テ・ファリキ」も英語とマオリ語の2言語で書かれています。

理想の子ども観を掲げ 保育の多様なあり方を尊重

「テ・ファリキ」の内容を見ていきましょう。

冒頭には「子どもは有能で自信に満ちた学び手である」という宣言が置かれ、「私たちの見

方が、私たちの子どもへの働きかけ方に影響を及ぼす」「私たちの見方が、子どもたちの『自分は自信に満ち有能である』という感覚に影響を及ぼす」という2つの文が続きます。

保育者をはじめ、子どもにかかわるあらゆる大人の子ども観は、その実践に表れますし、そのまなざしは子どもに伝わります。だからこそ、「子どもは有能で自信に満ちた学び手である」と冒頭で謳い、そうした子ども観を抱いて子どもに接してほしいと訴えているのです。これは、「児童は、人として尊ばれる」と冒頭に掲げる日本の「児童憲章」と共通する精神だと、私は考えています。

また、「テ・ファリキ」では、保育が4つの原則（principle）と5つの要素（strands）に大別して説明されています（表）。principleとは、言い換えれば「学びを社会文化的にとらえる際の視点」のことで、「エンパワメント」「ホリスティックな発達」「家族とコミュニティ」「関係性」の4つ、strandsとは要素、言い換えれば「幼児教育の中で展開される学びと育ちの領域」

表 「テ・ファリキ」が重視する原則と要素

◎原則 (principle)	◎要素 (strands)
<ul style="list-style-type: none"> エンパワメント ホリスティックな発達 家族とコミュニティ 関係性 	<ul style="list-style-type: none"> ウェル・ビーイング (心身の健康) 帰属感 貢献 コミュニケーション 探求

のことで、「ウェル・ビーイング (心身の健康)」「帰属感」「貢献」「コミュニケーション」「探求」の5つから成ります。

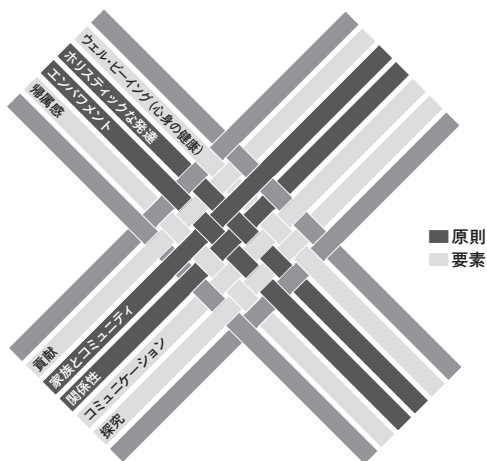
「テ・ファリキ」が実現しようとする保育の構造は、図のように可視化されます。これを見ると、3色計13本の線が縦横に交差していることがお分かりいただけると思います。2色計9本の線は4つの原則と5つの要素とを、つまりナショナル・カリキュラムが保育に必要なだと認める原理と要素とを示します。そして、もう1色の4本の線は保育施設それぞれの自主性を表します。つまり、国の方針と保育施設独自の創意とが縦糸となり横糸となり、いわば1つの織物が作られることを理想とするわけです。国が保育の舵取りを行うけれども、それにただ従うように求めるのではなく、多様な保育が行われることを歓迎する。そうしたメッセージが込められています。

自然を取り入れた遊びを重視することは日本の保育と共通

ニュージーランドの保育施設には、幼稚園や保育所、プレイセンターなどいくつもの種類があり、保育者主導と保護者主導、あるいは欧州系とマオリ系というように、様々な教育環境を整えています。

どの保育施設でも、泥や砂、草花、昆虫といった自然を取り入れた遊びを重視します。これは、日本の保育と似ているところです。ほとんどの園庭には砂場があり、そこで子どもが水を流しながら砂遊びをする姿がよく見られます。また、

図 「テ・ファリキ」の構造



※「Te Whariki Early Childhood Curriculum Ministry of Education Learnig Media Wellington 1996」を基に編集部で作成



園には、よく見える所に「テ・ファリキ」の図が掲げられている。

遠隔居住地の子どもや障がいなどで通園が難しい子どものための通信保育もあります。このように、子どもや保護者の求めに応じて多様な保育サービスを保障することも、「テ・ファリキ」の精神の1つです。

子どもの「学びの構え」を保育者が見取り記述する手法

「テ・ファリキ」の作成と並行して、それに基づく保育の成果をどう測るか、つまり評価方法の研究も進められ、2004年から2009年の間に、「ケイ・ツア・オ・テ・パエ」(Kei Tua o te Pae: 地平を越えて)という学びの評価事例集が刊行されています。

子どもは友だちや保育者との関係の中で、物事に対する意欲や態度などを総合的に身につけますから、幼児期の学びには、知識やスキルだけでなく、情緒が密接にかかわっています。したがって、幼児期の学びの評価は「できる」「できない」といった二項対立的な方法ではなく、もっと包括的になされなければなりません。そのための手立てとして、「ラーニング・ストーリー」という手法が考案されました。これは、子どもが友だちや保育者との関係性の中でどのように興味をもち、それをいかに伸ばしていったかという、「心の習性」「学習の型」を保育者が見取り、記述する手法です。

このような子どもたちの「心の習性」「学習の型」は dispositions と呼ばれ、日本語では「学びの構え」という訳語が定着しつつあります。日本の幼稚園教育要領が生きる力の基礎と位置づける「心情」「意欲」「態度」に似た概念であると、私は考えています。

また、評価手法である「ラーニング・ストーリー」は、「ストーリー」と名づけられたとおり、親しみやすい語り口調によってなされます。

保育学者である津守真先生の著書『保育者の地平』の中に、「一日、保育の現場に出ることは、一冊の本を読むようなものだ。理解しながら読むこともできるし、わけの分からぬまま読みとばすこともある」という一文があります。物語を読み、次の展開への期待にワクワクしながらページを繰るといふ楽しさと、子どもの気持ちを読み取り理解しながら関わっていくことの喜びや、成長を見取る楽しさとが似ているという指摘です。そして時には、待ったなしの時間経過の中で分からないまま展開することもあるのも保育であるわけですが。

「ラーニング・ストーリー」は、文字化されて記された学びの物語、成長の物語であるため、実際に読み、楽しむことができます。保育者はこれにより、保育者同士のほか、保護者や家族、地域の人とも対話し、子どもの成長について理解の地平を広げられるでしょう。子どもも「ラー

ニング・ストーリー」を読み、楽しむ一員ですから、「ラーニング・ストーリー」は子どもにも分かるように平易な言葉で書かれます。

また、先ほどご紹介したように、保育者の子ども観はその実践に影響すると、「テ・ファリキ」は指摘しています。別の言い方をすれば、保育の理念とは保育実践として表われるものであるということです。保育実践が子どもに反映することは言うまでもありません。したがって、子どもの「学びの構え」は保育者の実践の鏡であり、その記述である「ラーニング・ストーリー」は、保育実践の内容とその後ろにある理念、子ども観をも表しているのです。保育者はこれを読むことで、自身の実践に対する省察も得られるでしょう。

「ラーニング・ストーリー」は日本の保育への示唆に富む

「ラーニング・ストーリー」を作ることは、子どもの「学びの構え」の言語化、可視化です。ニュージーランドの保育者はこれを日々行っていますから、子どもの内面で起きている変化に気づきやすくなるのはもちろん、その気づきを他者が分かるように伝えられるようにもなります。これは、自らの子ども観と実践とを言葉で表現できるようになることでもあります。また、「ラーニング・ストーリー」によって、子どもや保護者と保育者とのつながりも強められるでしょう。日本の保育を考える上でも、示唆に富む評価手法だと思えます。

しかし、ただ形を真似るだけでは仕方ありません。ニュージーランドの保育者は、自身の子ども観を実践にいかにか反映させるか、子どもの成長をどのように捉えるかを絶えず考えています。こうした保育者の真摯な姿勢こそが「ラーニング・ストーリー」を支える理念であり、「テ・ファリキ」の宣言する精神を理解してこそ、「ラーニング・ストーリー」の長所を十分に発揮させられると、私は考えています。

1-1-3

第1節 講演 ● 世界の実践

イタリア ● ピストイア市 環境を通じて 心の安定や心地良さを追究

▶ピストイア市のECECの特徴は p.58
▶イタリアのECECの基礎データは p.112

名古屋芸術大学教授 **星 三和子** Hoshi Miwako



名古屋芸術大学人間発達学部及び同大学院教授。専門は発達心理学。保育者から乳児への文化的価値の伝達に関する日仏共同研究、乳児同士のコミュニケーションについての研究等、保育園をフィールドに研究を行ってきた。また最近は子育て・子育て支援についての4か国共同研究も行っている。東京大学教育学研究科教育心理学博士課程満期修了。著書に *Jeux et culture préscolaire*。(2010) Institut National de Recherches Pédagogiques, Lyon, France (共著)、イタリア、ピストイア市の統合的な乳幼児教育：「素材」を使った教育活動の発達の意義 (2014) 名古屋芸術大学研究紀要 35巻 pp.313-330。(上垣内伸子、向井美穂と共著) など。

※プロフィールは講演（2015年2月）時点のものです

独自の「教育憲章」に基づき 子ども主体の 乳幼児教育を実践

ピストイア市はイタリア中部のトスカーナ州に属する人口9万人の中都市で、中世以来の歴史があり、電車の車両製造や観賞用植木の栽培を主な産業としています。私は、2007年から毎年のように同市を訪れ、乳幼児教育に関わっています。最近、ピストイア市の6か所の保育園・幼児学校の観察調査に加え、保育者や行政担当者、教育コーディネーターといった人たちにインタビュー調査を行いました。その概要をご紹介します。

まずは、同市の乳幼児教育について概観しましょう。イタリアは地方分権が強く、0～2歳児が通う保育園、3～6歳児が通う幼児学校の運営には自治体に大きな裁量権があります。そこで、同市では教育文化局が幼児学校、保育園、児童館を一体的に管轄し、教育職員は全て保育士と幼児学校の教諭免許の両方を持つ人を採用

するなど、0～6歳の教育に統合性をもたせています（表）。

また、同市では独自に「教育憲章」を作成しています。ここには、「市全体が教育のリソースであり、子どものためのサービスの場である」「乳幼児の教育にはその独自性があり、より上位の教育施設のための準備ではない」「教育は子ども主導でなされる」など、子ども主体の教育方針が謳われています。さらに、乳幼児教育の目標と基本理念として、「子どもを暖かく迎えるという基本の上に、探求心、好奇心をもち、自分の行動を決められると同時に協調性をもった子どもを育てる」と掲げています。

表 ピストイア市の乳幼児教育制度

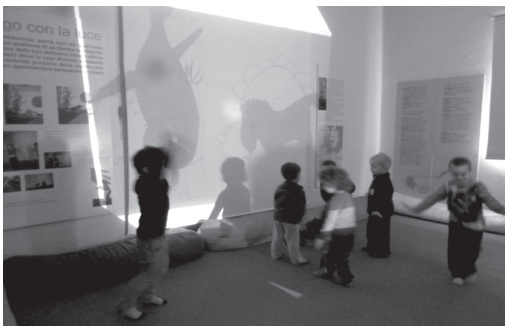
	保育園 (asilo nido)	幼児学校 (scuola dell' infanzia)
対象	0～2歳児	3～6歳児
職員に求められる資格	保育士・幼児学校教諭の免許	
管轄省庁	教育文化局	

グループ活動の仕方に 日本の保育との違いを実感

ピストイア市では、保育園は子どもの教育施設と位置づけられます。保護者が就労しやすいように子どもを預かる施設ではありません。保育園では、子どもを有能で周囲と能動的に関わり対話する存在として捉え、社会、情緒、身体、感性、知性などの包括的な発達を支えています。美的で落ち着いた環境の整備や家庭の参加に力を入れていることも特色です。

幼児学校も学校の準備段階ではなく、幼児期に適した教育を行う施設とされ、遊び中心のホリスティックな教育を行っています。国が示す乳幼児教育の5領域（「自己と他者」「身体と運動」「言語能力、創造性、表現力」「会話とことば」「世界を知る」）をベースとして、子どもの関心や知識への欲求、探索や学習への動機づけを大切にしています。さらに、情緒的な心地よさや心の安定、質の高い空間、子どもの主体性の尊重なども重視される要素です。

保育園・幼児学校の1日の流れは共通しています。9時30分からの朝の会では、クラス全体でおやつを食べたり、歌を歌ったりして過ごします。その後、昼食までは小グループ活動を行います。年少の子どもは5人ほど、年長の子どもは10人ほどのグループをつくり、それぞれに保育者が付き添います。部屋や空間は遊びの目的や材料ごとに分かれており、各グループは興味に応じた場所で遊びます。ただ、グルー



園での小グループ活動。集団ではあるが、子どもは思い思いに好きなことをする

プ活動で個人を縛らず、子どもは1人ひとり好きなことをします。したいことの方向性が一致してはじめて、何人かで一緒に遊ぶのです。日本の保育におけるグループ活動に比べて、集団内で個が尊重されていることを実感します。

昼食では、花を飾るなどの美しいテーブルセッティングで生活を大切にすることを学びます。2歳児以上のクラスでは子どもが当番として配膳をします。保育者も職員も子どもと一緒に食事をして、会話を楽しみます。

午睡をするのは保育園・幼児学校ともに半数ほどの子どもです。ピストイア市では祖父母が近所に住み、子どものお迎えをする家庭が多く、子どもの半分ほどは昼食後に帰宅するからです。残った子どもは午睡後、帰宅まで自由遊びをします。

具体的な環境を通じて 心の安定や心地良さを追究

保育園・幼児学校の乳幼児教育の特徴をより具体的に見ていきましょう。まず心の安定や心地良さを追求が、人間関係だけではなく、具体的な環境によっても図られていることが挙げられます。例えば、落ち着いた色彩で統一した美しい空間、子どものペースに沿ってゆったりと設定された活動時間、騒がしくないように配慮された音環境、また学年や学校の移行に際しての連続性への配慮など、随所に工夫が見られます。また、子どもが落ち着くという理由から、私物を持っての登園・登校が認められています。これは、日本の園とは大きく異なる点ではないでしょうか。

子どもの目線で考えられた居心地の良い空間の中でこそ、子どもは心が安定し、大事にされていると感じ、仲間との共同生活が促され、好奇心や探索心が生まれて創造や想像をしたくなる。こうした考えに基づいた環境づくりが行われていることがお分かりいただけるでしょう。

さらに、美的感覚を育む環境づくりにも、私は注目しています。美しく落ち着ける空間をつ



子どもの目線で考えられた、居心地がよく安定できる生活空間

子どもの自由な発想が尊重される。この子たちは森で集めた木の実と葉で森の道を再現している



くることによって、他者とつながりたいという欲求や、深く追求したいという欲求を子どもにもってほしいという狙いがあります。また、子どもの中に美に対する感覚と親しみの芽を育てることは、基本的な生きる力や人格を育むと考え、3歳児以上のクラスでは保育空間における物や素材、活動などが美的に配慮され、芸術作品との触れ合いも重視されています。

遊びにおいて、市販の玩具ではなく、「素材」を重視するのも特徴です。先ほどお話ししたように、部屋や空間は遊びの材料によって分かれています。私が観察した限りでは、大きな遊具や運動遊びは少なく、素材を教材として、イマジネーションを引き出す活動に力を入れています。またそこには、素材や形の性質を知ることが認知発達を促すという考えがあるでしょう。どの子どもも創意工夫をする姿、異なる年齢の子どもが同じ素材を用い、別の活動を生み出している姿が、とても印象的でした。

合議制に基づく柔軟な運営体制

ピストイア市の乳幼児教育では、カリキュラ

ムや保育計画の作成過程が非常に柔軟です。

保育園に関しては、国にも市にも指針はなく、職員の話し合いにより計画が作成されます。最初に年間プログラムを決めず、子どもたちの観察をもとに毎週のプログラムを決めるという方法が採られているのです。幼児学校についても、おおまかな国の指針はあるものの、それに従うかどうかは自治体に委ねられています。市には指針やカリキュラムはなく、やはり職員の話し合いが基本となります。最初に年間プロジェクトの大きなテーマを決め、以後は子どもの行動や発言の観察をもとに柔軟に設定されるのが特徴です。

保育園・幼児学校ともに運営においては職員チームの協働が重視されており、園長は存在せず、全員が施設の責任を分担し、あらゆることが合議で決定されます。それを市の教育コーディネーターが支えます。こうした体制が、専門性の高い保育者が生き生きと働く姿につながっていると、私は考えています。合議制というと意思決定などに苦勞しそうなイメージをもつ方がいらっしゃるかもしれませんが、保育者にインタビューしてみると「そのほうが上手くいく」という声がほとんどでした。また、外部評価は実施されず、自己評価と協議によって評価や改善が行われています。

保護者は日常的に活動に加わり、家庭から様々な物を持って来るなどして園運営に協力しています。保育者は対話の他、ドキュメンテーションを通して保護者と情報を共有し、協働を心がけています。また、保護者が参加するイベントはあくまでも保護者同士が仲良くなる機会と捉えられており、保育者が育児について保護者を指導するという姿勢はないとのことでした。

以上、同市の乳幼児教育の理念や実践について述べてきましたが、日本の園との共通点や相違点を踏まえて参考にさせていただけると幸いです。

1-1-4

第1節 講演 ● 世界の実践

中国 ● 上海市

▶ 中国のECECの特徴は p.54
▶ 中国のECECの基礎データは p.86

伝統的な集団教学から 遊び中心の幼児教育へ

中国・華東師範大学教授 **周 念麗** Zhou Nianli



中国・華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任、教授。1995年にお茶の水女子大学心理学士号、1998年東京大学大学院教育学修士号、2003年中国華東師範大学心理学博士学位取得。2004年6-12月、米国 Arizona State University 客員研究員として乳幼児の情緒発達を研究。2006年5月-2007年3月、国際交流基金フェローとして、名古屋大学で統合保育について研究。研究領域は児童心理、親子関係、0-3歳児の多元知能の測定と育成方案。主な著作に、「就学前児童の発達心理学」「就学前児童の心理健康と指導」「自閉症児の社会認知——理論と実験研究」「就学前特殊児童の統合保育における比較と実証研究」、「0-3歳児の多元知能の評価と育成」など。

※プロフィールは講演（2015年2月）時点のものです

中国の幼児教育の現場に 急速に浸透する「遊び」

私は、日本の保育現場を視察した多くの中国の幼稚園園長から話を聞いたことがあります。日本の子どもたちが一様にたくましく、そして礼儀正しく育てていることに誰もが驚いています。今、中国の保育者の多くは、日本の幼児教育を参考にして努力をしようという意識もっています。

近年、特に充実が図られているのは、幼児教育における「遊び」です。私の講演では、中国（とりわけ上海市）の幼児教育の現場で見られる幼児の遊びの実態とともに、そこに隠されている理念や遊びに関する園の考え方、そして国の方針についてお話しします。

自然主義を出発点とする 陳鶴琴の「生きる」教育

先進的な乳幼児教育が行われている都市、イタリアのレッジョ・エミリア市を指す「レッ



スーパーマーケットのレジを模し、「商売遊び」に興じる子ども

ジョ」という言葉は、中国の保育者の間でも一般的に使われています。自由な探索をはじめ、音楽遊び、自己表現、また芸術を通して表現力を高める活動など、様々な遊びが中国の幼児教育に取り入れられています。これは中国の特徴と言えるかもしれませんが、一人遊びだけではなく、社会性を高めるためにままごと遊びも重視しているほか、店舗を模した「商売遊び」にも力を入れています。運動遊びを取り入れようとする園も多いものの、残念ながら近年は大気

汚染が進み、外遊びをさせられず、室内遊びが目立っています。

このように遊びの重要性は浸透しつつありますが、もともと中国には、「業精於勤、荒於嬉（業は、勤で精になり、遊びで無駄になる）」という諺があるように、遊びは無駄と考える伝統がありました。古代から遊びは「戯」、すなわち悪いことと捉えられてきましたが、1949年の中華人民共和国の建国とともに、旧ソ連から集団教学の考え方が流入し、同時に遊びがわずかながら取り入れられるようになりました。遊びの重要性に対する認識を数値でイメージするならば、この段階では20%ほどでしょう。1979年に経済開放政策に伴って諸外国の保育について学ぶ機会が増えたことから、それが40%ほどに高まりました。さらに、1999年頃には海外交流の深まりによって60%ほどになり、2014年に中国教育部が公布した「3～6歳児童の学習と発達ガイドライン」の方針によって、現在は80%ほどにまで高まっていると考えられます。

幼児教育における遊びに関する理念を中国で形成したのは、児童心理学者である陳鶴琴です。陳鶴琴は、アメリカの教育思想家であるデューイの「自然主義」思想の影響を色濃く受け、「活きる」教育を提唱しました。陳鶴琴の思想は、子どもの自発的な探索と学習を重視する点で日本の幼児教育と共通しますが、中国独自の事情も反映されています。出発点は自然主義ですが、そこには、中国の伝統との調和、多くの民族意識の取り込み、そして経済発展の衝撃による社会生活の変化などが混在しています。

陳鶴琴の思想に基づいた遊びには、3つの特徴があります。社会生活を模倣する「社会性」、現実の風景を再現するようごっこ遊びを行う「現実性」、そして子どもの目で見たとや体で感じたことを遊びの中心とする「直接性」です。

ただ、中国の幼児教育における遊びには、陳鶴琴のほかにもう一つ、西洋からの影響という柱もあります。具体的には、ドイツの教育者フ

レーベルが創案した遊具「恩物」、イタリアの教育者モンテッソーリの「感覚教育」、デューイの「自然遊び」、そしてレッジョ・エミリア市で重視されている「自発探索」などの影響を受けていると考えられます。

国のガイドラインが 幼児教育における遊びを推進

先ほどお話しした、国が2014年に公布したガイドラインも、中国の幼児教育における遊びに大きな影響力をもっています。このガイドラインは、幼児教育を「健康」「言語」「社会」「科学」「芸術」の5つの領域に整理し、子どもの遊びに関する方針として、「子どもの自発性を重視する」「生活そのものを重視する」「遊びの独自価値を大事にする」などを掲げています。こうした流れを受け、今、中国の保育者は、いかに集団教学から遊びへと変化させるかを模索しているのです。

その先進的な事例として、上海市の幼稚園における一日の活動の要素を紹介しましょう。8時間保育のうち、「生活活動」は37%、「遊び活動」は25%、「運動活動」は25%、「学習活動」は13%です。遊び活動と運動活動を合わせると半分を占めることから、遊びの重要性に対する認識の高まりが見られます。

また、中国では、子どもの数の急増に伴って保育者が不足し、小学校の教員を異動させることで対処しています。国としては、初任者研修



上海市の幼稚園で自由遊びをする子どもたち。都市部の先進的な園では、子どもの自発性を引き出そうと、子どもが興味をもちやすい遊びが行われている

と異動者研修によって、子どもの遊びを重視するなど、幼児教育の質を高めることに力を注いでいます。

理念は浸透しつつあるものの 地域差の克服などが今後の課題

今の中国の幼児教育では、子どもの自発的な遊びを充実させようとする気運が高まりつつあります。レッジョ・エミリア市で実践されている、遊びと学びとが一体化した乳幼児教育に倣おうとする保育者も多く、子どもが興味・関心にもとづいて独自に遊ぶ「独自性」、材料の組み合わせによって科学的な因果関係を探る「探索性」、また科学的な遊びを盛んに行う「創造性」といった要素を追求した活動を取り入れる動きが強まっています。それに伴い、環境づくりや遊びコーナーの充実が図られるようになり、登園した直後から子どもが自由に活動を選んで遊ぶような園も増えているのです。

しかし、遊びを重視する園は中国全土ではまだ多くはありません。中国の国土はあまりに広く、都市部と農村部とでは保育者の意識に大きな差が見られます。先にご紹介した上海市の園のような実践がある一方で、農村部では依然と

して集団教学が主流であり、子どもたちが文字や計算を学ぶ光景が目立っています。意識的にはレッジョ・エミリア市の乳幼児教育の理念を追求しようとしても、知と行の差と言うべきでしょうか、なかなか実践に移せない例も少なくないのです。

ただ、国は幼児教育の質の向上に力を注ぎ、保育者への全国的な研修・育成を図っているため、都市部と農村部との差は少なくなってきていると、私は考えています。遊びを中心とした幼児教育が主流となる日がくるのはもう少し先のこともかもしれませんが、今後の進展に大いに期待しています。



中国北西部・新疆ウイグル自治区の幼稚園の算数の授業。農村部を中心に、従来の集団教育主流の園も依然として多い

複数の視点から評価してこそ 幼児期の発達を保障できる

東京大学准教授 北村 友人 Kitamura Yuto



東京大学大学院教育学研究科准教授。専門は比較教育学、国際教育開発論。カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院修了。博士（教育学）。慶應義塾大学文学部教育学専攻卒業。国連教育科学文化機関（ユネスコ）、名古屋大学、上智大学を経て、現職。共編書に、「The Political Economy of Educational Reforms and Capacity Development in Southeast Asia」（Springer、2009年）、「揺れる世界の学力マップ」（明石書店、2009年）、「激動するアジアの大学改革」（上智大学出版、2012年）、「Emerging International Dimensions in East Asian Higher Education」（Springer、2014年）など。

※プロフィールは講演（2015年2月）時点のものです

保育は 教育・経済・社会の 3側面から考える必要がある

近年、保育をめぐる状況は世界的に大きく変化してきています。欧米諸国をはじめとする先進国はもとより、発展途上国と呼ばれる国々でも教育と経済発展との関連性が近年になって注目され始め、保育を充実させることの重要性が広く受け入れられるようになっていきました。幼児に対する教育やケアが人権に関することであるという認識は、世界共通です。それを踏まえたうえで、主に3つの側面から保育を考えていくと、全体像をつかみやすくなります。

1つ目は、「教育的側面」です。幼児期の教育は、その後の就学や学習に大きな影響を及ぼすことがさまざまな調査で明らかになっています。例えば、2012年に発表された経済協力開発機構（OECD）による調査結果からは、就学前教育の期間を1年間延ばしたり、就学前教育を受ける子どもの割合を増やしたりすることで、15歳児の学習到達度にプラスの影響を及

ぼすことが明らかになっています。

2つ目は「経済的側面」で、幼児期の教育は年齢が上がってからの教育より経済効率性が高いことが分かっています。その一例として、ノーベル経済学賞を受賞したJ・ヘックマンらが「困難な状況にある子どもへの投資効率」というテーマで行った研究が挙げられます。これは、就学前教育、学校教育、職業訓練を比較し、就学前教育が最も経済的投資効率が高いことを証明した研究です。また、先ほどご紹介したOECDの調査では、低所得家庭出身の子どもに向けた就学準備プログラムにおいて、より質の高いプログラムを実施する方が、投資効率が高くなることも明らかにされました。

3つ目は、「社会的側面」です。保育のみならず初等教育や中等教育を普及させ、格差を是正していく中で、社会経済的な階層間格差が縮まることが期待されています。これと関連して、世界的に乳幼児死亡率が高い、アフリカのサハラ砂漠以南の地域（以下、サハラ以南アフリカ）の事例をご紹介します。同地域では、2008年の1年間に命を落とした5歳未満の子

どもの数が440万人にも上りますが、もしすべての母親が初等教育を受けていれば約420万人に、中等教育まで受けていれば約240万人に減らすことができただろうということが、研究で明らかになっています。

保育の「質」を いかに評価するかは国際的な課題

保育に関する研究や理論が国際的に積み上げられ、関心が高まる中で、2010年9月に、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の主催による世界幼児教育会議がモスクワで開催されました。私は日本政府代表の1人として出席し、参加国130か国以上の代表の方々と議論しました。会議では「保育の普及と質向上がいかに重要であるか」が改めて強調され、そこで大きな論点となったのが「保育の質をどのように評価するか」という問題でした。

保育の質とひと口にいても、教師やその他従事者の質、教育プログラムの質、環境や設備の質もあるというように、実に多様です。また、子どもたちの成長に目を向けた場合にも、記憶などの認知的な側面と同時に、非認知的・情動的な側面をどのように評価するかは難しいところです。

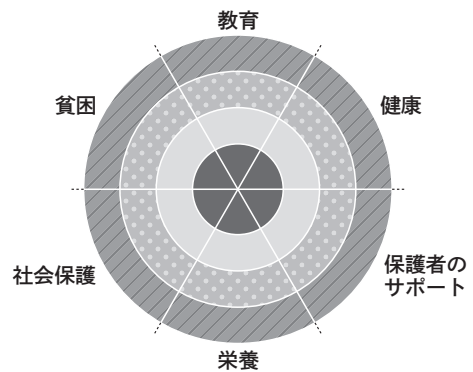
質を評価するには、定性的なアプローチと定量的なアプローチの両方が求められます。定性と定量のバランスをとりながら、指標として目に見える形をつくる必要があると意見がまとまり、「子ども開発指数」という指標の改訂版をユネスコが作成することで国際的な合意に達しました。

子ども開発指数は、国際NGOである Save The Children が発表しています。これは、「5歳未満の乳幼児死亡率」「5歳未満の低体重児の割合」「初等教育の非就学率」「15歳以下の人口」という4つのデータを掛け合わせて数値化し、子どもの置かれた状況を見取るというもので、既に国際的な比較も行われています。国別の順位を見ると、上位を先進国が、下位をサ

ハラ以南アフリカや南アジアの国々が占めています。シンプルで分かりやすい評価基準ですが、4つの指標をデータ化するだけでは包括的な評価といえず、幼児をめぐる状況の改善につながりにくいという課題がありました。

そこで、ユネスコは2014年に「包括的な幼児期の発達に関する指標 Holistic Early Childhood Development Index (HECDI)」のフレームワーク（図）を打ち出しました。これは、「子どもの発達の成果」（子どもの生存と年齢に応じた発達・学力の能力）、「家庭・家族」（適切な資源を有し、認知的な刺激や感情的な支援に溢れた家庭環境における子どもの経験）、「プログラム・サービス」（保健医療や栄養摂取に関して、質の高いプログラムやサービスへのアクセスを子どもや家族が有していること）、「政策・法律」（子どもや家族に対する支援の政策やプログラムを通して、子どもの権利が守られ、維持されていること）という4つの領域について、教育、健康、保護者のサポート、栄養、社会保護、貧困という6つの指標を組み合わせ、

図 HECDIの概念モデル



- …子どもの発達の成果（子どもの生存と年齢に応じた発達・学力の能力）
- …家庭・家族（適切な資源を有し、認知的な刺激や感情的な支援に溢れた家庭環境における子どもの経験）
- …プログラム・サービス（保健医療や栄養摂取に関して、質の高いプログラムやサービスへのアクセスを子どもや家族が有していること）
- …政策・法律（子どもや家族に対する支援の政策やプログラムを通して、子どもの権利が守られ、維持されていること）

国や地域ごとの保育を評価しようとするものです。

例えば、「子どもの発達の成果」なら乳幼児死亡率や低体重児の割合、「プログラム・サービス」なら予防接種を受けている子どもの割合、「家庭・家族」なら両親が有給による産休や育休を取得できるか、「政策・法律」では子どもの出生証明書が発行されるかというように、幼児期の発達を多様な側面から評価することを目指しています。

認知的・非認知的な能力の両側面を包括的に見取ることが大切

保育の内容に関してOECDの比較調査結果などを見ると、先進諸国における保育の類型は大きく分けて2つあることがわかります。1つは、就学準備を重視するタイプの保育である「就学準備型」。もう1つは、生涯教育の基盤として保育を位置づける「生活基盤型」です(表)。

アメリカやイギリス、フランスなどでは、基本的に就学準備型の保育を重視しています。またドイツやスウェーデンなどは、以前は生活基盤型の教育を重視してきましたが、近年はPISAの影響を受け、就学準備型への転換が進んでいます。特にドイツは2000年代の「PISAショック」から、子どもの学力低下は幼児期の教育に

原因があるとして、就学準備型へと大きく舵を切りました。

一方、日本や韓国では生活基盤型の保育が行われていますし、ニュージーランドのように就学準備型にも生活基盤型にも当てはまらない国もあります。ただ、先進国全体で見ると、生活基盤型から就学準備型に転換した国、あるいは転換しようとしている国が目立ちます。この背景には、移民の増加や経済のグローバル化、格差拡大など、社会的な構造転換の影響があると考えられます。

就学準備型の保育を行う国が増えているため、保育の評価軸は子どもの学習の定着度合いに偏りがちです。しかし、情動的・非認知的側面からも子どもを見取らなければ、保育の評価軸としては不完全だと、私は考えています。また、就学準備型に傾きすぎること、いわゆる“子どもらしい時期”を子どもから取り上げることになってしまうのではないかという懸念も感じています。

その他、教育をめぐる行政構造についても、国として一元化すべきか、地域ごとの自主性や多様性を尊重すべきかが、多くの国で論点になっています。一般的には、質向上の観点からは中央集権型が優位といわれますが、地方の独自性がプラスに働く面も多々ありますから、一概にはいえません。

子どもにとって豊かな教育やケアとはどのようなものか、それをいかに実現するか。この問題を解決するためには、さまざまな要因について考えなければなりません。だからこそ、保育者、保護者、研究者といった子どもにかかわるすべての人が力を合わせ、じっくり検討していく必要があると、私は考えています。

表 保育の類型

就学準備型

◎特徴：就学への準備を重視し、認知的スキルの育成に力を入れる

◎就学準備型の保育を長年行っている国：アメリカ、イギリス、フランスなど

生活基盤型

◎特徴：幼児期を想定する「ソーシャル・ペダゴジー(social pedagogy)」の伝統に則り、保育を生涯学習の基盤と位置づけ、ケア・養育・教育に対してホリスティックにアプローチ

◎生活基盤型の保育を長年行っている国：日本、韓国など

*ニュージーランドのように、就学基盤型にも生活基盤型にも当てはまらない保育を行っている国もある

1-3

第3節 パネルディスカッション ● 世界の保育と日本の保育

司会



CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授 **榊原 洋一** Sakakihara Yoichi

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、医学博士。1951年東京都生まれ。東京大学医学部を卒業後、同大学附属病院小児科に勤務。発達障害のある子どもの医療に携わりながら、発達のメカニズムを研究する。東京大学医学部講師を経て、現職。専門は、小児科学、小児神経学、発達神経学、国際医療協力、育児学。主な著書に『乳児保育の基本』（フレーベル館）、『発達障害と子どもの生きる力』（金剛出版）など。

※プロフィールは講演（2015年2月）時点のものです

パネリスト [50音順]

十文字学園女子大学教授 **上垣内 伸子** Kamigaichi Nobuko

東京大学准教授 **北村 友人** Kitamura Yuto

中国・華東師範大学教授 **周 念麗** Zhou Nianli

名古屋芸術大学教授 **星 三和子** Hoshi Miwako

立教女学院短期大学准教授 **森 眞理** Mori Mari

※パネリストの詳細なプロフィールは、第1章第1節・第2節所載の各パネリスト個別の講演をご覧ください

各国、各地域の 保育の長所について

榊原 森先生はイタリアのレッジョ・エミリア市、上垣内先生はニュージーランドにおける保育のナショナル・カリキュラム「テ・ファリキ」、**星**先生はイタリアのピストイア市、それぞれの乳幼児教育の長所について、あらためてご紹介ください。また、3人の先生方の挙げた長所について、周先生と北村先生にコメントいただきたいと思います。

森 一概には言えませんが、レッジョ・エミリア市の乳幼児教育は、子どもの知的好奇心や感性を伸ばすことが多いと思います。私が同市の乳幼児教育を観察していてそう感じますし、同

市で乳幼児教育を受け、大人になって再び同市で暮らすようになった人に私がインタビュー調査をしたところ、そうした回答がたくさん得られました。

もともと、同市の保育者は、子どもに対する同市の乳幼児教育の影響について「分からない」と答えています。子どもは一人ひとり異なるため、「こういう良い影響がある」と無責任に返答するわけにはいかないというわけです。

上垣内 「テ・ファリキ」による保育の長所は、人としての温かさを伸ばせることでしょうか。

ニュージーランドの保育に用いられている「ラーニング・ストーリー」を読むと、どの子どもも保育者の温かいまなざしのもとに育っていると感じます。「ラーニング・ストーリー」

が記述する dispositions (学びの構え) とは、「物事に対する肯定的、意欲的なたずまい」と言い換えることができると、私は考えています。それを尊重する保育者と日々触れ合うことで、子どもは相手を尊重する姿勢が育まれるのでしょ

う。
星 縦断的な研究を行っていないのではっきりとは言えませんが、ピストイア市の乳幼児教育によって、何事にも前向きに取り組む姿勢や好奇心が育まれると思います。また、保育者と小学校教師とのつながりや、園と小学校との協働による取り組みなどによって、幼小連携が促されることもあるでしょう。

周 レッジョ・エミリア市の乳幼児教育は、子ども自身の気持ちを尊重し、「取り組んでみたい」という意欲をうまく引き出していると思います。

中国の幼児教育では、従来、子どもが興味をもつかどうかをあまり顧みない集団教学が主流だったので、子どもは受け身になりがちでした。近年は、子どもの自発性を重視し、好奇心を伸ばすような取り組みを行う幼稚園が増えています。これは、同市の乳幼児教育の影響によるものです。

北村 保育の質をいかに測るかという話と関係しますが、優れた保育の実践例に共通する要素の1つとして、バランスが取れていることがあります。

先ほど私が講演(本書第1章第2節参照)でご紹介した、ユネスコによる2014年のフレームワークでは、教育、健康、栄養、保護者のサポート、貧困、社会的な保護・社会保障といった複数の領域を組み合わせ、保育の質を見取ろうとしています。教育だけ、健康だけというように、特定の領域だけを重視するのではなく、いくつもの領域をまんべんなく見取ること、つまりバランスを取ることが重要だと考えます。

また、星先生が講演(本書第1章第1節参照)でご紹介くださった、子どもにとって落ち着ける空間の整備にピストイア市が力を入れている

というお話が印象に残りました。落ち着ける空間をつくることは、日本では保育のほか、学校教育でも重視されています。良い教室とは何かを考えると、にぎやかな教室とは限りません。じっくり物事を考えるためには静かな教室のほうが良いはずですから、落ち着いた空間の整備は子どもの成長に重要な意味をもつでしょう。

比較を通して得られる 日本の保育への示唆

榊原 レッジョ・エミリア市、ニュージーランド、ピストイア市の乳幼児教育と日本の保育とを比較すると、どのように感じますか? 森先生、上垣内先生、星先生お願いします。

森 レッジョ・エミリア市の人々は生活を楽しんでいると、私は感じます。例えば、休日の過ごし方です。私の調査では、オペラを見に行くなど、多くの人が休日だからできることをして楽しんでいました。保育者も例外ではありません。

ここには、日常の中に面白いことを見つけて楽しく暮らすという、同市民の伝統的な気質が表れていると思います。こうした伝統的な気質があることは、子どもの気持ちに寄り添い、その興味・関心をうまく伸ばす乳幼児教育が同市で見事に実現されていることと無関係ではないでしょう。

同市民に共通して見られる、自らの伝統を大切にする姿勢は、日本への示唆に富んでいると思います。日本の文化にも、良いところはたくさんあります。例えば、来日経験があるレッジョ・エミリア市民は、日本家屋の障子や襖などに侘び寂びを見だし、賞賛します。昔から続いてきた日本の良さに、日本人自身があらためて気づき、楽しみ、尊重していくことが、日本ならではの優れた保育に磨きをかけることにつながるのではないのでしょうか。

上垣内 現在の日本では、保育に限らず、ほとんどの教育の現場で、子どもの言葉による表現や意思疎通を重視し、そのための能力を伸ばす

ことに力を入れています。ただ、日本人は、古来、言わなくても分かる、しぐさや表情から感じ取るといった、いわば惻隱の情を大切に、思いやりのある社会を築いてきました。これは、日本の良い伝統ですから、近代教育においても大切にすべきだと考えます。情緒の基盤が形成される保育においてはなおさらでしょうか。

もちろん、保育の現場で、「しっかり自分の意見を言いましょ」「友だちの意見を聞きましょ」と子どもに伝えることは重要です。言葉によるコミュニケーション能力は社会で生きるために欠かせない力ですから、しっかり育む必要があります。しかし、ただそれだけに偏るのではなく、もう少し感情のひだに触れるような保育を目指すべきではないでしょうか。

言葉でははっきり伝える力と言外の心の動きを感じ取る力、この2つを同時にいかに伸ばすかが日本の保育の課題だと、私は考えています。

星 ピストイア市の乳幼児教育と日本の保育には、その独自性の尊重など、共通するところがありますが、相違点もあります。例えば、子どもへの情緒の伝え方です。日本では、「思いやりをもちましょ」「優しくしましょ」というように、言葉で伝えます。一方、ピストイア市では、心地良い空間を整えたり、子どもが友

だちの大切さを自然と感じられるような遊びをしたりというように、環境を通して伝えます。

また、ピストイア市では、子どもの言葉のほか、表情や行動、子ども同士の関係などを保育者が詳細に記録し、これを基に保育者同士が話し合います。つまり、一人ひとりの子どもを複数の保育者が包括的に見取る体制ができています。子どもの様子を保育者が共有し、それについて意見交換ができますから、より良い保育実践に向けた改善にも取り組みやすくなるでしょう。日本の保育でも参考にさせていただきたいと考えます。

認知的・非認知的の両面から 子どもを見取ることが必要

榊原 保育の質をいかに測るかという点についても、先生方のお考えをうかがいたいと思います。

周 日本の子どもは他者を思いやる優しい心を持ち、なおかつ、たくましくて元気です。私たち中国の保育研究者が日本の保育に敬意を抱く理由の1つは、こうした子どもを育てていることにあります。子どもの心身の発達を見取るとは、保育の質を測る重要な軸であると、私は考えます。



北村 情動などの非認知的なスキルをどのように測るかが、今日の保育の世界的な課題だと思います。私が講演（本書第1章第2節参照）でご紹介した経済学者J・ヘックマンが、非認知的なスキルや潜在能力などを踏まえて子どもを評価する必要があると述べています。これは、上垣内先生が先ほどおっしゃった、惻隱の情といったものの重要性と共通する指摘だと言えるでしょう。

現在、初等教育段階では、認知的なスキルに偏らない評価法を求めて具体的な動きが始まっています。例えば、経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査（PISA）では、コミュニケーション能力や批判的思考力といった非認知的なスキルも含めた、総合的な学習到達度を測れるように、何か国かでパイロット調査をしています。さらに、これを就学前段階でも行おうとしていますから、認知的なスキルの向上に偏りがちな就学準備のあり方を変えることにもつながると期待しています。

森 レッジョ・エミリア市の乳幼児教育では、子どもの認知的な面と非認知的な面とを合わせて見取っていると感じます。その例として、私が同市の乳幼児教育施設の4歳児クラスで目にしたエピソードをご紹介します。

子どもが4～6人ほどのグループになり、自画像を描いていた時のことです。眼鏡をかけた女の子が描き上げた自画像を、同じグループの男の子が見て、「何か変だな」と言いました。これを聞いた保育者が「どこが変なの？」と男の子に尋ねると、男の子は女の子の自画像をじっと見ながら少し考えていましたが、やがて「目が少し小さいみたい」と答えました。「お友だちがこう言っているけれど、あなた自身はどう思う？」と保育者に問われた女の子の答えは、「目が小さくても、心の中ではうれしいと思っ

ているの」。すると男の子は、「でも、心の中で思っているだけでは分からないよ」と一言。この言葉を受けて、女の子はじっと考えてから、「もう少し描いてみる」と言い、ふたたび机に向かいました。しばらくして、加筆した女の子の自画像ができあがると、男の子はすぐに見て「素敵になったね」と声をかけ、女の子は「良かった」とうれしそうに答えました。

保育者が子どもに内在するものを尊重し、それによって子どもがお互いへの理解を深めていることが、お分かりいただけると思います。

上垣内 保育においては、認知的な面と非認知的な面とは密接に結びついており、両者を截然とは分けられないのではないのでしょうか。今の森先生のお話でも、しっかり考えるという認知的なプロセスを経ることで、子ども同士がしっかり理解し合えるようになるという非認知的な成果が生まれています。

私は、以前、ピストイア市の乳幼児教育実践を見学した時、子どもが遊びを通して認知的にとっても成長し、それが情緒面での成長をも促していること、また、落ち着いた環境という非認知的な面が、認知的な面を刺激することに気づきました。ニュージーランドの「ラーニング・ストーリー」は、子どもの認知的、非認知的両面の成長を包括的に記述し、可視化しようとしていると、私は考えています。

榎原 子どもの認知的な面と非認知的な面とを分けることが適切かどうかはともかく、どちらか一方に偏ることなく包括的に見ることが重要である。これが、先生方の見解の共通点だと考えられます。また、世界の優れた保育実践と日本の保育実践とに共通点がたくさんあることも、多く指摘されました。会場にいらっしゃる保育者の先生方、ご自分の園での実践を堂々と世界に発信していきましょう！